

現代と単独布教

前回紹介した天理教韓国伝道庁の100周年を記念して行われた講演で、「戦後何故天理教だけが韓国に根付いたのか」をテーマに講演した李元範教授は、その答えとして、第1に、天理教の布教は、信仰実践主義の単独布教者によってなされたので、権威に対しておもねず、朝鮮人との連携（つながり）が持て、第2に、世界宗教への自覚と確信を朝鮮人信者と共有し（教理取得によって可能）、それが戦後布教の核となったことを指摘した。こうしたことから、布教師の不屈の精神で「おたすけ」に励むことがいかに大切であるかがわかると同時に、被布教地の信者を育てることの重要性が理解できる。それには、教理の伝達と教理の理解が不可欠である。

李教授にかぎらず、単独布教師による布教活動が天理教の布教の特徴であることは指摘されている。それは、国内においても、国外においても同様で、まさに「病人さん」を探しては、その人のたすかりを願い祈る行為だった。『稿本天理教教祖伝逸話篇』には、次のような話が載っている。（傍点は堀内）

「明治8年4月上旬、福井県山東村菅浜の榎本栄治郎は、娘きよの気の違いを救ってもらいたいと西国巡礼をして、第八番長谷観音に詣ったところ、茶店の老婆から、『庄屋敷村には生神様がござる。』と聞き、…教祖にお目通りした。すると、教祖は、『心配は要らん要らん。家に災難が出ているから、早ようおかえり。かえったら、村の中、戸毎に入り込んで、42人の人を救けるのやで。なむてんりわうのみこと、と唱えて、手を合わせて神さんをしっかり拝んで廻るのやで。人を救けたら我が身が救かるのや。』と、お言葉を下された。…教祖のお言葉通り、村中ににをいがけをして廻わり、病人の居る家は重ねて何度も廻わって、42人の平癒を拝み続けた。…」(42「人を救けたら」)

「摂津国安立村に、『種市』という屋号で花の種を売って歩く前田藤助、タツという夫婦があった。…不思議なお導きで、庄屋敷村へ帰り、教祖にお目通りさせて頂いた。すると、教祖は、『あなたは、種市さんや。あなたは、種を蒔くのやで。』と、仰せになった。タツは、『種を蒔くとは、どうするのですか。』と、尋ねた。すると、教祖は、『種を蒔くというのは、あちこち歩いて、天理王の話をして廻るのやで。』と、お教えになった。…」(13「種を蒔くのやで」)

こうして、天理教に入信し、教祖直々に「人を救う」ことを教えられた人々にとって、「(他)人」のたすかりを祈ることが重要となっていた。「種市」夫婦は、「花の種を売りながら、天理王命の神名を人々の胸に伝えて廻った。そして、病人があると、二人のうち一人が、おぢばへ帰ってお願いした。すると、どんな病人でも次々と救かった」と伝えられている。こうした行為には「私心」はなく、まさに「人の救い」を願う心になっている。その結果が、自らの救いにもなった。

「天理王命の神名を人々の胸に伝える」ことを、天理教では「にをいがけ」と呼んで、ほぼ「布教」と同様の意味をもつ。しかしながら、現代社会は、人々の流動も激しく、また、マンションやアパートなどの「閉じた集合住宅」に住む人は多い。その

ような状況では、人々との信頼関係を結べるほどに通ったりすることはとても難しくなっている。日本では宗教に対する不信感が強く、同時に信仰に対して無関心であるので、榎本栄治郎が行ったような「戸別」訪問による「にをいがけ」は工夫を要することになる。「一言教理」を書いたチラシなどのポスティングが問題になることもある。

このような事態は、今や、国内に設置されている1万を超える天理教の教会が、まさに地域にとっての教会となっているかどうかということの問い直しであるのかもしれない。「土着化」＝地域の教会に育つということを考えるとき、その信仰をしている人々の姿を映して、「なるほど」と思ってもらうのがいい。「おさづけ」を授けられる「おさしづ」には、

「…人間という身の内という、皆神のかしもの神にかりもの、心一つ我が理。…自由という理は、何処にも無い。たゞ誠一つの心の理にある。誠というは、一寸には弱いよに皆思ふなれど、誠より長き堅きものは無い。誠一つは天の理。天の理なら、直ぐと受け取る直ぐと返やす一つの理、一名一人の心に誠一つの理があれば、内々という十分睦まじいという理が治まる。それ世界成程という、成程の者成程の人やなあと言う。誠一つの理で自由。又一つ、これまで互いや扶け合いという、これは日々論す理、人を救けるというは真の心誠一つの理で、救ける理で救かるという。…たすけ一条のためこのう一つの理を渡そ。…」(明治22年11月2日など)

と、誠一つで自由となり、「成程の人やなあ」といわれるようになれと教えられる。そして「互いや扶け合い」し、「救ける理で救かる」からこそ、そこに喜びが溢れてくる。そうした「成程の人」であるからこそ、人々は耳を傾けてくれることにもなろう。

また、「日々には家業という一つの理これが第一、内々互いへ孝心これが第一、二つ一つが天の理と論し置こ。いつへまで変わらんよう、変わらん事情に、たすけ一条のためこのうの理を渡し置こ。」(明治23年5月3日など)とも論され、「日々には家業」と「内々互いへ孝心」は「二つ一つ」となって、「国々所々に多分の理を下ろしたる」(明治28年7月13日など)教会は、「誠治まれば、国々所々の手本雛形鏡」(明治22年2月4日など)であると教えられる。

新しい教えが会おうのは、常に新しい経験である。それは国内であっても国外であっても、聞いた人にとっては未知の教えであることを布教師は自覚していなくてはならない。世界がグローバル化し、情報が飛び交い、家族の‘かたち’が多様になってきた現在であるからこそ、「教祖」に立ち返り、地道な行為の積み重ねが必要となってきたのかもしれない。一方で、現代社会が抱える緊急の問題に常に敏感であることも必要で、出会った人々の課題を自らの課題とし、社会の一員である信仰者という自覚も求められる。布教地で考え行動することが、「たすけ」の基本となり、「なるほどの人」となって信頼されれば、教祖の思いを伝えられることになる。教祖の思いが現実化すれば、「〇〇教」と言わなくてもよくなるのかもしれない。